

野上彌生子研究

渡辺 澄子著

近代文学研究双書

八木書店

<著者略歴>

渡 辺 澄 子 (わたなべすみこ)

1930年 東京に生まれる。

1953年 日本女子大学文学部卒業。

現 在 日本近代文学研究所員。

現住所 東京都練馬区中村 2-20



野上彌生子研究 <近代文学研究双書>

定価 1,500円

昭和44年12月10日 第1刷発行

著 者 渡 辺 澄 子

発行者 八 木 敏 夫

発行所 株式会社 八 木 書 店

〒101 東京都千代田区神田神保町1-45

電 話 03-291-2965 / 振替 東京 10457

印刷所 奥村印刷 製本所 美成社

©1969 S. WATANABE

3395—9003—8500

近代文学研究双書 『野上彌生子研究』 もくじ

概観	一
作家となるまで	二四
その児童観	八九
「海神丸」と高吉丸の間	二三
「真知子」論	三六
「若い息子」論	五九

「迷路」論	一七四
「秀吉と利休」論	二三
「笛」「鈴蘭」その他	二四〇
戦後の社会評論	二六五
野上彌生子年譜	二七九
野上彌生子参考文献	二九九
あとがき	三〇五

概観

一九六五（昭和四十三年）年末、野上彌生子は、文化功勞者として表彰された。文化功勞者として表彰されるということに限らず、すべて賞に類するものは、それを受けた（この場合は表彰された）ということによって、その作家、作品の価値が決まるというものではない。むしろ、ときには、賞を受けたことによって文学者の墮落を意味することもある。眞の価値は歴史が決定する。しかし、野上彌生子の場合、表彰されるべくして表彰されたという感が、その賞の種類のいかにかわりなく強い。私はすなおにそれを喜ぶたい。

野上彌生子は明治十八（一八八五）年五月六日、大分県北海部郡臼杵町一二三番地に、祖父の代から続く酒造家小手川角三郎の長女として生まれた（戸籍名ヤエ）。兄弟に、異母兄次郎、妹ミツ、弟武馬がある。彼女は臼杵の高等小学校を卒業した翌年（明治三十三年—一九〇〇）、十五歳で上京し、叔父豊次郎のもとに身を寄せ、豊次郎の知人島田とおして木下尚江の紹介で明治女学校に入学した。明治女学校高等科をおえた彼女は二十一歳（明治三十九年）で、のちの英文学者で能や謡曲の權威であり、また法政大学総長にもなった同郷の野上豊一郎と結婚した。豊一郎は当時帝國大学（現東京大学）で英文学を勉強中の学生であった。そのためか入籍は明治四十一年十月二十八日になっている。豊一郎は夏目漱石の門下生の一人で木曜会のメンバーであった。彌生子は夫豊一郎を通して、夏目漱石や、彼をとりまく人びと（たとえば鈴木三重吉や寺田寅彦など）の文学的知的雰囲気のかなかに身をおくようになる。大正期教養主義作品と一般にいわれる彼女の文学的方向はこのような場所で形づくられていった。

彼女がはじめて作品を発表したのは二十二歳のときである。漱石の紹介で「ホトトギス」の巻頭に掲載された写生文「縁」がそれで、その後つぎつぎと写生文風の短篇をおもに「ホトトギス」と「中央公論」に発表している。このように彼女の文学的出発は恵まれていて、それは宮本百合子が、坪内逍遙の推輓で十八歳によって「中央公論」に処女作「貧しき人々の群」を発表して文壇に出たのと似ている。しかし、どんなに恵まれた出発であつてもそのことが文学者の優劣を決めるものではない。それはその後の問題である。

明治四十年に「縁」を発表して以来、今日まで作家生活六十年間を彼女は一貫した彼女のマイ・ペースで歩みつづけ、八十四歳の今日なお現役作家として、彼女の姿勢を崩していない。しかもただ書きつづけているというのみではなく、一作ごとにそれが問題であり、同時にそれがすぐれてよい作品であるということは、まことに稀有の文学的生活をもった作家であるといわなければならないと思う。このように息の長い末広りの作家は現代作家では宮本百合子がいるが、彼女は惜しくも五十二歳で没している。とすればほとんど皆無といつていい。八十四歳という肉体的な悪条件を負いながらも、なお衰えぬ彼女の意欲になにか肅然とさせられるものがある。

私は、野上彌生子を今日の多くの女流作家の水準から考えればきわめてすぐれた文学者であると思う。そしてまた、女流作家には少ない知的な空気を身につけた文学者である。私は彼女の作品から、また生き方から多くものを学んだし、学びたい。彼女の作品のいくつかは永い生命をもつだろうと思う。野上彌生子の作家生活六十年の年譜の内容が語っているように、彼女は決して多作家ではなく、流行作家的な華々しい一時期をもったこともない。むしろ地味な作家である。

野上彌生子の作品は処女作「縁」をはじめとして初期のものは手固い写生文である。やがて「父親と三人の娘」（明治四十四年）あたりから写生文の影響から次第に抜け出して新しい領域に踏み出していつている。とはいっても、

まったく写生文の境地から脱却したわけではない。大正三年の「新しき生命」から大正八年「母親の通信」に至るいわゆる家庭物シリーズは写生文の影響下から脱け出した小説にはなり得ていない。「緻密な観察を以て客観的な写真」(「女子と文学者」夏目漱石)の要素を多分にもっていることで、写生文の範疇に半身が浸っていて、小説としての構想力は、この段階ではまだ弱いのである。彼女の身边は、母親として主婦としての多忙な生活がとりまくようになる。さらに彼女は実父の死(大正三年)や、漱石の死(大正五年)につづき夫豊一郎の父母をあいっいで亡くしてもいる(大正六年)。このころ彼女は知的な母親の感覚で、母親の心理や、子供たちの生態や心理をみつめて「母上様」(明治四十三年)、「新しき生命」(大正三年)、「五つになる兄」(大正三年)、「二人の小さいヴァガボンド」(大正五年)、「母親の通信」(大正八年)など一連の作品を書いている。彼女の初期の作品は彼女の身边に取材したものが多く、主婦として母親としての彼女は、家庭や、それをとりまく日常的瑣事に類することを写實的に精緻な筆で描写していたが、やがて彼女の視野は次第に家庭から外へと向けられていく。「海神丸」(大正十一年)は人肉を食う話(正確には食べようとして実際には食べなかった)である。大岡昇平の「野火」(昭和二十六年)、武田泰淳の「ひかりごけ」(昭和二十九年)などの先駆となる作品であるが、人間の限界状況をきわめて冷静な筆で本多秋五のことばを借りるならば「ひた押しのリアリズム」で描いている。前記の「母上様」や「新しき生命」、また女中の生活や心情を女中を使う女主人の立場から描いた「二頭の小馬」(のち「新しき命」収録の際「小指」と改題、大正四年)や「渦」(大正五年)などの女性そのもの、母親、家庭の主婦そのものともいえる作者と同一人の筆に成る作品とは思えぬほどの逞ましいリアリズムで貫ぬかれている。このことは「海神丸」にやや劣るが「大石良雄」(大正十五年)についてもいえる。ここにくると子規系の克明な写生文を完全にこえている。「大石良雄」は芥川龍之介の「或る日の大石良雄」(大正六年)の系列に属するもので、歴史上の伝記的人物に彼女流にリアリティックな批判を加えたもので、これまでの彼女の作品の領域をこえ出た大

きな飛躍といえる。このような作品を書く一方では、故郷白杵で高等小学校に通いながら、かたわら国学者久保会蔵（千尋）のもとで「古今和歌集」「萬葉集」「源氏物語」「枕草子」など日本の古典を学び、さらに「四書」の講読も受けたという教養の上に、オーステインはじめ、エリオットらのイギリス女流文学を読み、訳し、ロシアの女流数学者ソーニャ・コヴァレフスカヤの自伝、バルフィンチのギリシャ・ローマ神話、その他を訳すなど常に知識を求める勉強家として、漱石に学んだ教養主義を土台として次第に文学的教養と社会的識見を深めていき、その視野は社会の動きに向けられていった。やがて昭和初年の左翼思想の疾風怒濤を、高等学校の生徒にも成長した長男をもつ母親として、法政大学の教授である夫豊一郎の周辺に数多く見聞したであろう、時代の良心に傷つき悩む青年たちの姿を看過し得ぬものとして、彼女の内心の大きな問題とならずにはいなかった。ここに彼女にとってきわめて野心的な作品であり、そのことによってはじめの長編に構成された「真知子」（昭和三年八月—五年十二月）が書かれる。

「真知子」は上層中流階級に育った知的な若い女性が、自身の属するプチ・ブルジョアの息づまるような「退屈と滑稽と醜陋」に厳しい批判の眼を向け、そこからの脱出をはかるが、その脱出路を革命運動に参加することに見出そうとして、そのはるか手前で挫折するといった作品である。さらに説明を加えるならば、真知子という美しく知的な女性の結婚問題をめぐっての物語であるが、この時代の思想的な波は真知子のような女性にまで深くかぶさり、自己の属する階級の愚劣さにむけられた批判は、対極の革命家への尊敬と憧憬に深い内心の曲折なしにつながっていく。真知子は貧農出身の革命家関に愛を求めて積極的になち向っていく。一方には上層階級の考古学者河井を置いて、二つの階級の間を往復しながら彼女をとりまく家族・交友と、その生活、心理、感情、思想を描いていく。しかし、二つの階級とはいっても、作者自身の属する上層中流階級の生息は克明に描くことはできても、それに対応する階級はすこしもリアリスティックに描き得ていない。「海神丸」で示した冷静・客観的なリアリズムがここにはみられない。

また、革命家、および革命運動の描き方はきわめて観念的でお手軽にしか描かれていない。たしかに関に象徵されているような革命家がいたことも、現在なお多くいることも確かであろうが、作者は中野重治や、宮本百合子のような生き方のあることに眼を向けようとはしない。それはなぜか。作者の人生観、世界観、思想にかかわってくる問題であるが、漱石に学んだ大正期教養主義に、その後のたゆみない近代的教育の摂取にもかかわらず、良心的知識人として自己と階級の問題に直面しても、彼女自身の属する上層中流階級の生活基盤からの脱出を彼女の生き方ののびきならぬ問題として真剣に取り組むことなく、論理的に現在の資本主義社会における社会機構の悪を認識し、そのような社会の変革を考えはしても、結局は日本社会の体制の内部からはみ出ることのない、したがってそのために彼女自身行動に出るということは決して得ないことと無関係ではあるまい。それは究極のところでは革命を、革命運動を、革命家を信じていないからといえるだろうが、彼女自身が真知子のように革命をきわめて観念的にしか把握し得ていないからであろう。それはまた、世間一般の意味において恵まれた生活環境をもつことで、個人の力では打ち破れぬ資本主義の社会組織からくるさまざまな矛盾に真正面にぶつかることの少ないことからきているのではないだろうか。だからこそ関という人間像を造型するとき、革命家関を人間的に劣等に仕立てざるを得ず、反対に彼女が繰り返すその愚劣さを批判している上層階級に属する河井を、階級運動にすら無限の理解を示すものわりのいい良心的な人間に造型しているのではないだろうか。しかし、ここにはリアリティがない。作者の限界性をここにみることができよう。とはいっても、解放運動の高揚期であったこの時点で、社会の変革の必要を肯定しながら、運動および運動者を痛烈に批判したこの作品は、多くの破綻をもつとはいえず、やはり昭和文学史上、記念碑的役割を果たしているといえよう。

「真知子」によって提起した問題をさらに一歩進めた作品に「若い息子」（昭和七年十二月）がある。真知子の男性

版ともいえる工藤圭次が主人公である。圭次の生活の基盤は真知子と同じ上層中流階級に設定されていて、彼は母親の愛を一身に集めている旧制の高等学校の生徒である。一般的にいつて何ひとつ不自由のない温室の生活から、この時代の左翼運動に良心的な形で身を挺していく過程を描いたものである。しかし、圭次の運動への参加の仕方は、それが彼の内面の止みがたい要求の、さらに理論的裏付けによって自己の生き方に方向を与えたというのではなく、彼の属する階級への理論的批判からというより、むしろその愚かさに対しての反撥から出発したものである。それにしても、真知子が恋愛を通して革命運動に近づき、恋愛が破綻するとすぐさま革命運動からも遠ざかるといった、一步誤まれば反共的な通俗小説におちこむ危険性を持った描き方にくらべれば、圭次の運動への参加にはリアリティがあり、その描き方には数段の発展がみられる。圭次は真知子より人間的に数等優っている。作者は学生運動について、のちに次のように述べている。

私たちの毎日の生活において、なにより合理的でかつかしい生き方は、自分のおかれた位置と時間を可能な最大限まで利用することだといひ得る。学生が学生として申し分ないまでにその位置と時間をわがものとしたうえで、なお活潑な政治運動に挺身されるほどの余裕と熱情をもつならば、それもひとつの行動としてある場合望ましいかも知れない。しかし、学生がことごとくかくまで秀抜で、余力と精気に充ちているとは、残念ながら断定されないのであろう。はげしい政治のうず巻に飛びこむ前に、現在の位置と時間をもう少し有効に使う必要のあるものまでが、一種の流行として、あるいはやじとして、しずかな知識の摂取よりも、ただもの騒がしく動くことの面白さにつりこまれるならば、名前はいかに美しかろうと、醜く、愚である（『学生の政治運動』―昭和二十二年）

私は彼女のこの学生運動観は一般的な意味では正しいと思う。漱石の弟子たる彼女の近代個人主義意識を基礎とし

た大正期の教養主義のプラスをここにみることができる。しかし、すべての場合にこのように言い切ってしまうだろうか。人生において彼女のいう「合理的でかしい生き方」をすることが、やや飛躍した表現を用いるならば罪悪であるような事態がある。哲学志望の圭次は、高等学校でつまずくことなく大学に進みたい。だから「自分のおかれた位置と時間を可能な最大限まで利用」する「合理的でかしい生き方」がしたのである。にもかかわらず、止むに止まれぬ純粹な気持からそれを放棄して学生運動の渦中に飛びこんでいく圭次の姿は感動的であり、きわめて美しい。しかし圭次の止むに止まれぬ気持というのは、矛盾に満ちた社会の変革に向かつてのものではない。学校の処分の不公平に対して「根はまっ直ぐで、筋のたたないことや、曲ったこと」を許せぬ彼の純粹な良心、いわば正義漢的な怒りの情熱が、退学処分を受けた学友の復校運動の先鋒として彼を立ち上らせたのである。もちろん、圭次の行動は革命運動の大きい輪の中に入れることはできる。また単に正義感からのみ立ち上ったとしても、やがて闘いのなかで学び、傷つきながら、未来の展望と彼の自我の内面的要求をもつことになり、それに密着したものである。高度の闘いに自己をつきやらぬことにならぬとは限らぬ。しかし、彼女の作品における圭次にはそれはいまのところ不可能であらう。彼女自身、彼女の生き方にのびきならぬものとしてそれを展望していないし、彼女の心奥の大問題とはなっていないから。このことは作者の他の作品が語っている。「若い息子」に主題の上で続く「迷路」にもそのことはいえる。だが、「真知子」から「若い息子」にきて、そこに大きな飛躍のみられるのは主人公ばかりではない。主人公の母親もまた大変化を遂げている。

そして、作者の生涯の代表作である「迷路」（昭和十一年十一月—三十一年十一月）が「若い息子」の統編的性格をもつて書かれた。戦争のため作者の本意ではない十年間の中断があったとはいえ、実に二十年間の歳月をかけて書かれた大河小説である。圭次の後身ともいえる菅野省三が主人公である。省三が大学でどのような運動をしたのか、その

運動にどのような動機で、またはどのような思想の過程を経て入ったのか説明されていないが、ほんの数か月たらい廻しにされただけでもろくも兜をぬいだ転向者として設定されている。作者の独壇上ともいえる上層中流階級の青年である。転向者としての恥を背負って、生活の再建をはかるうとして彷徨する青年の姿を克明に描いている。転向者というはがすことのできぬ烙印を額にびったりとつけた省三の人生は厳しい。しかし、その厳しさに立ち向っていくには省三はあまりにも弱い人間である。幼な馴染みの多津枝が「ほんとうに後悔したんでもない癖に、みんなそんな顔してお辞儀しちやって出て来るじゃないの」というとき、省三は心に深く突きささったとげの痛みを感じる。彼の転向が「ほんとうに後悔したんでもない」ものであるとすれば、いっそう私は省三がどのような動機で運動に入ってしまったのか知りたい。彼が彼の生き方とわがちがたく結びついたものでそれがあったならば、たとえ表面的に転向という形をとらざるを得なかったにせよ、精神まで萎縮してしまったような身を屈した生き方以外の生き方がなかったろうか。彼が自己の生き方として深い内面的要求に従って運動に入ったのであれば、負債を負った形で恩恵と威嚇によった縁故による屈辱的な職を与えられて、それに従っていられるのは不思議である。省三の仲間と同じく転向した貧農出身の木津は、運動に入って放校されたゆえに、才能があるにもかかわらず、二流新聞の家庭欄の記者として訪問記事など書かされている。それにくらべて省三は、手をよごし、泥にまみれて自己の力で生きようとはしない。常にやり切れないみじめさを内面に藏しながらも、革命運動において闘わねばならぬ側からの恩恵と威嚇のなかでそれにながって生きているのである。転向者の省三が、少なくともそのことを恥として良心の声に従った生活の再建をはかるうとする生き方を求めて彷徨するならば、常に権力者、財力者の庇護のもとに生活をはかるということから離脱して、何ものにも束縛されない自己の力で生きることが根本問題にならなければならぬと思うが、作者はそのことを軽くしか取り扱おうとしない。だから、省三の良心の彷徨が、私にはわが身のこととしてひびいてこない。いわゆる

「転向」したことによって書かれた中野重治の一連の作品のもつ「転向者」の内面的苦痛と鋭い感受性の新鮮な迫力はきわめて美しく、読者を深い感動にさそいこむが、省三の描かれ方にはそれはない。社会機構の变革をいくら論理的に学び、考えても、変革しなければならぬ当の社会機構の構成員たちから決然と離別することなく、その者たちに直接依存することで彼の生活が保証されているのであれば、独立個人として生きることをしない彼がどうして革命運動に参加し得たのであろう。しかし、後半は省三の妻万里子の養父が戦場にいかずにすまされる方法として軍需産業に席をおくことをすすめるが、彼はそれを拒否して令状を受けて戦線に向かう。ここに彼の知識人としての良心がある。しかしこの良心は反戦の立場に立てば底の浅いものともいえるのではないか。義父の申し出を拒否して殺し合いの戦線に赴くことの方が勇氣のある反戦主義者といえるかどうかは疑問であらう。したがって省三の反戦の立場が論理的にも心理的にも抜け落ちている。

戦場で、満州の特務機関に働きながら、一方中共の解放活動にも参加している、学生時代の運動の仲間木津にあい、「新規まき直し」の道として延安へ脱出しろとすすめられ、脱出をはかる。この結果は優柔不断な省三のぎりぎりの生命を賭しての勇氣ある行動であった。私は延安に着いた省三が何をしたか。さらに、敗戦後の混乱のさなかに日本に帰ってきた省三がどのような生き方をしているか切に知りたい。八十四歳という高齢の作者ではあるが今後いっそう壮健に省三の戦後の社会での生き方の描かれるのを期待したい。

「秀吉と利休」（昭和三十七年一月―三十八年九月）は作者の初期の代表作「大石良雄」の作品系列に属する。桃山時代を背景にして、政治の権力者秀吉と、芸術家の代表利休の関係を、作者独自の視点で歴史に新しい解釈をほどこして人間解剖を見事に果している。この作品についてはのちに詳述したい。

以上、野上彌生子の作家生活六十年のなかで最長編であり、かつ代表作でもある「迷路」を中心にそこに至る「真

知子、「若い息子」の三部作を軸にして、ごく簡単に彼女の文学的生涯を概観してきたが、結論として、月並みな表現をすれば、野上彌生子は、今日の女流文学者の水準にあつてきわめて優れた個性的な文学者であるといえると思う。彼女の文学の特性は、倫理的、人道的であつて反戦文学としての大きな枠に入れることができる。しかし、それがとくにはなまぬるく、はがゆく、もう一步ふみこんでくれないかと思われることがあるが、彼女の創作歴が示すように、決してはねあがつたり、飛び越えたりすることなく、したがって間にあわせのいい加減な作品を決して書こうとせぬ点で今日稀な作家といえると思う。漱石の弟子たるにふさわしい「立派」な作家である。しかし、誤解を恐れずにあえていうならば、彼女の生活の基盤がそれを可能にした面もあつたのではなからうか。たとえば、戦争中、戦争に懷疑であつた者さえが次第に興奮に巻きこまれ、酔いしれていったなかで彼女は最後まで戦争否定の立場を崩さず、興奮に巻きこまれたことも決してなかったと書いているが、彼女がそのような毅然とした態度を終始とることのできたのは、もちろん彼女の歴史を正しく見通す冷静な眼と勇氣により、これは高く評価されねばならぬが、節をまげぬために餓死をも牢獄をもおそれぬ戦争反対というのとはいささか違うと思う。作品を発表しないで沈黙していても食べていくことができ、戦火に焼かれて家を失ない、身を置く場所を求めて逃げ惑わなくても、軽井沢の家があつたという生活の基盤を彼女がもっていたということは、そのことに少しも関係しないであらうか。そしてこのことが、彼女が日本国民の最大公約数的生活を充分に理解し得るところにいてののではなくて、いわば特権階級の座にあることを意味するといえないだろうか。そして彼女はこの特権的なものからの離脱をはかろうとはしない。宮本百合子のような行動に自己の生き方を求めようとはしない。なにも革命的な実行動に入らなければならぬなどと単純、幼稚なことをいおうとしているのではない。社会変革を肯定する立場に立つならば、革命運動や革命家を描く描き方に、「海神丸」にみせたような、創作物でありながら作中事件、作中人物の真実体験者としてのリアリティのある描き方によ

って読者をとらえ得たのではなかっただろうか。しかし、これらがリアリティに欠けるのに反して、「真知子」や「迷路」でべた一面に描写されている特権階級の人びとの生活や思考は、作者が否定しているものでありながらも実に生き生きと躍動的に描かれている。

また、一方、「笛」（昭和三十九年）や「鈴蘭」（昭和四十一年）など庶民の姿を描いても、流行作家の安手の作品と違って彼女らしい精緻な「うまい」作品であるが、「迷路」の多津枝の描かれ方のように魅力的には描かれず、観念的な造型になっている。それは庶民の生活がどっぷりつかっている汗くさい問題と無縁の場所で、机上で作られた作品であるからではないだろうか。止まるところを知らぬ無限の知識欲から得た知はあっても、その知が生活との格闘を通じて深く人生を知るという面で浅いからではないだろうか。

六十年を超える作家活動をいまなお、その年齢を感じさせない精神的若々しさでつづけている作者の文学歴を眺めると、寡作な作家といわれ、作者自身、決して多作しないこと、勉強を欠かさぬことをモットーとしてきたと語っているが、創作だけでもおよそ百五十篇くらいあり、他にかなりの量の翻訳があり、さらに数えきれぬほど夥しい量を持つ随筆・感想の類がある。これをもう少し細かく分類すると小説（写生文をふくむ）、戯曲、童話、翻訳、紀行文、随筆、感想、伝記、書評、詩（詩一、校歌一）などきわめて多岐にわたっている。さらに加えれば対話、座談会の類、人生相談までふくまれよう。宮本百合子をはじめとして女流作家の多くが「私小説」的方法をその作品に用いているのに対して、彌生子の作品は「私小説」でないことがひとつの特色であり、ここに特異性がみられるのであるが、おもに大正期の作品に「私小説」的方法をかなりなまな形でとった作品もやはり相当量みられるのである。しかし概して「私小説」的方法を用いた作品はよくない。「ひとにも干渉しないが、自分にも干渉しないではしい。誰にも知られたくない面はあるのだから」というような意味のことを作者は語っているが、林芙美子や平林たい子などとはま